看護師の実習指導が就職選択に与える影響

Effects of Training Guidance of Nurses Give to Job Selection

中村　仁志[1)]、丹　　佳子[1)]、太田　友子[1)]、
縄田　真澄[2)]、松原　育恵[2)]、安村真由美[2)]、山下麻衣子[2)]、由良野嘉代子[2)]
Hitoshi Nakamura、Yoshiko Tan、Tomoko Oota、
Masumi Nawata、Ikue Matubara、Mayumi Yasumura、Maiko Yamashita、Kayoko Yurano

要旨

現在、各病院では病院説明会、病院見学、インターンシップなどで病院のアピールを行い、新人看護師の確保のため様々な方策をとっている。そうした中、看護臨地実習は病院・看護をアピールでき、看護師確保のための絶好のチャンスであると考えられる。看護学生が、実習病院での実習指導をどのように受け止めたかを聞き、それが就職を考えるとき、どう影響するのかについて検討することで、学生が実習病院を就職先として検討する方策の一助になると考える。

そこで、教育課程の違う3校を対象に、Y総合病院をモデルとして看護学生の臨地実習での印象から、実習病院および実習指導をどのように受け止めたかを聞き、それが就職を考える時にどう影響するかを分析した。

実習終了後、Y総合病院に「就職したい」ものの割合が「就職したくない」ものの割合より上回っていたが、「迷っている」ものが最も多かった。日本語版ECBTの評価では、実習の基本となる指導について評価はどの学校も高く、踏み込んだ指導では高校、大学の評価が低かった。就職を【希望するもの】と【希望しないもの】の項目比較から、実習指導はその病院への就職を決める重要な要素であることが明確になった。

キーワード：日本語版ECBT、実習指導、学生評価、就職

Abstract

Currently, hospitals are appealing to hospitals to secure newcomer nurses through hospital briefing sessions, hospital visits and internships at each hospital. Nursing clinical practice is a great opportunity to secure nurses. We asked about how nursing students took training guidance. And We examined how it affects employment.

We asked the impression of practical training at clinical practice for three school students who had different curriculum that were practiced at Y general hospital. We analyzed how the evaluation will affect when We think about employment.

From the results, it became clear that practical guidance is an important factor for determining employment in the hospital.

keywords：Japanese ECBT, practical guidance, student evaluation, employment

1）山口県立大学看護栄養学部看護学科
Depertment of Nursing,
Faculty of Nursing and Human Nutrition, Ymaguchi Prefectural University
2）山口県立総合医療センター
Yamaguchi Prefectural Grand Medical Center

1　はじめに

現在、各病院では病院説明会、病院見学、インターンシップなどで病院のアピールを行い、新人看護師の確保のため様々な方策をとっている。そうした中、看護教育での臨地実習は病院・看護をアピールでき、看護師確保のための絶好のチャンスであると考えられる。大井ら[1]は、就職先を選択した理由について調査を行い、28のカテゴリーを抽出している。その中で、「実習病院である」ことを理由にしたものは、4番目に多いカテゴリーであったことを報告している。

また、看護師養成校の立場としては、実習指導において卒業生が実習病院・病棟に勤務しているということは、その人物が他のスタッフとのコミュニケーションを取り持つ緩和剤の役割を取ってくれるというメリットがある。卒業生はその学校の教育を理解しており、学生への実習指導がスムーズに行われることが多い。また学生は、卒業生であるという親近感から緊張がほぐれ、より効果的な実習を行うことができる。このように卒業生が実習病棟にいるということは学生が看護の知識・技術の習得に対しメリットがあるだけではなく、看護教員と実習指導者及び施設との関係構築にも多大な役割を果たす。

病院としては臨地実習を受けた学生を多く新人看護師として確保したいと考え、学校としては、実習病院に多くの卒業生を送り出したいと考えから、利害関係は一致する。

そこで今の学生が求める就職先の要件を明確にするとともに、看護学生が、実習病院での実習指導をどのように受け止めたかを聞き、それが就職を考えるとき、どう影響するのかについて検討することで、学生が実習病院を就職先として検討する方策の一助になると考える。

2　方法

1）対象

Y総合病院で実習を行っているA大学（看護学科3年次）、B看護学校（2年課程3年次）、C高校（看護科：高校課程3年次）の学生及び生徒を対象とした。

2）方法

実習終了後、対象者へのアンケート調査を行った。

3）調査内容

①病院の印象：就職したい病院か否かとその理由

②実習について

実習病棟、実習期間

実習指導方法の評価について

Japanese Effective Clinical Teaching Behaviors（以下日本版ECTB）[2）3）]

4）倫理的配慮

山口県立大学倫理委員会の承認（承認番号27-35号）を受けている。尚、調査に関しては、発表、報告をする場合には個人が特定されることがないこと、その他不利益がないことを説明の上、協力を求めた。

3　結果

A大学47人、B看護学校24人、C高校39人、計110人を分析の対象とした。

1）出身地別

県内出身者が92人（83.6％）、県外出身者が18人（16.4％）で、県外出身者のうち14人（77.8％）がA大学であった。

2）Y総合病院への就職について

（1）就職の希望

実習終了をY総合病院に就職したいかどうかを、1.是非したい　2.したい　3.迷う　4.したくない　5.絶対したくない、の5件法で聞き、1・2を「したい」群、4・5を「したくない」群としてまとめたところ、「したい」群が27人（24.5％）、「迷う」群が最も多く62人（56.4％）であった。「したくない」群は21人（19.1％）だった。「したい」群が最も多かったのはC高校で16人（41.0％）であった（n=110）（図1）。

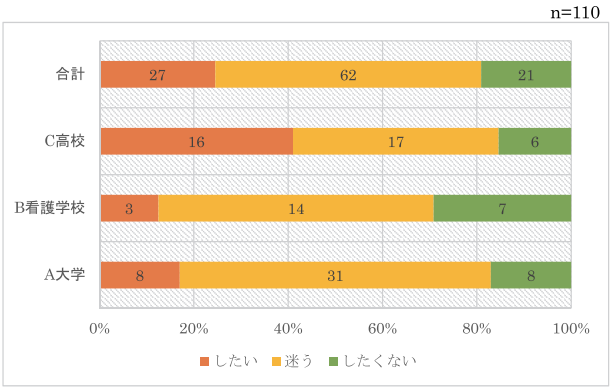

図1　Y総合病院への就職について

(2)－1　就職を希望する理由

就職をしたいもの 27 人の理由を聞いたところ、「県の病院だから」「実習で病院に良い印象を持ったから」が 15 人と最も多かった（図 2）。

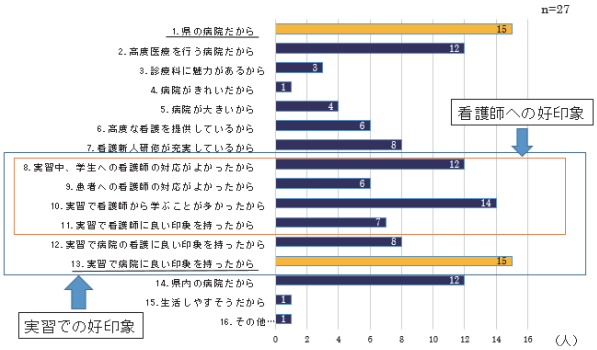

図 2　就職を希望する理由

(2)－2　就職を迷う・希望しない理由

就職を迷う 62 人・希望しない 21 人にその理由を聞いたところ、「他県に就職したいから」が 32 人と最も多く、「生活しにくそうだから」13 人、「高度医療を行う病院だから」9 人、「実習中、学生への看護師の対応が良くなかったから」8 人が多かった（図 3）。

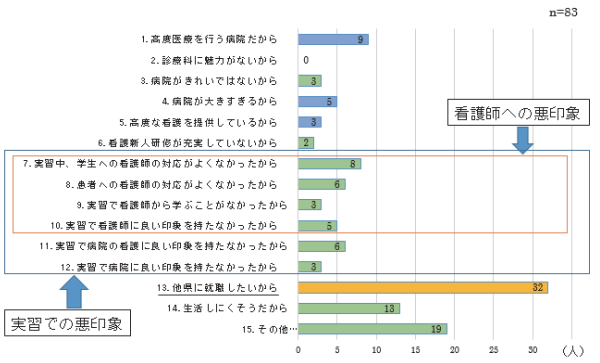

図 3　就職を迷う・希望しない理由

(2)－3　就職に関しての自由記載

その他 19 人の自由記載は表 1 の通りであった。

表 1　就職を迷う・希望しない理由（自由記載）

病院の問題	・他職種との連携が曖昧な気がした。看護師が患者の個別性を他職種に伝えることをしていないように感じた。患者さんへの情報提供が十分にできていないように思った。学生がパンフレットを作る必要があるのかも疑問に思った。 ・自分の行った病棟は雰囲気がよかったが、他から印象がよくないと聞く病棟があったから。 ・職員にやめた方がいいと言われたから。 ・残業がすごく多いと思う。 ・あまり魅力を感じなかったから。
住居の問題	・実家のある他県に就職したい。 ・地元の戻ることを入学時から決めていた。 ・地元で就職したいから。 ・実家が遠いから。 ・自宅から少し遠い。7階とICUはとてもよかった。 ・自宅から少し遠いから。 ・県内のどこで就職するかを悩んでいる。
進路の問題	・現在の所属病院。 ・就職が決まっている。 ・看護師の進路を考えていない。 ・看護師として就職するかもまだ決まっていないから。 ・教職に関して未定のため。
他	・個人的事情があるため。

3）実習指導について

(1)－1　実習指導（方法）について

日本版 ECTB の 43 項目それぞれの項目を 5 件法で聞いた。

全体で評価 point が高かったのは、「32 看護者は、患者と良い人間関係を取っていたか」4.30 point、「3 グループカンファレンスや計画発表に適切な助言をしてくれていたか」4.18 point、「1 学生が実習を進める上での情報を提供してくれていたか」4.14 point、「8 カンファレンスや計画の発表にたいし建設的な姿勢で指導してくれていたか」4.08 point、「31 必要と考える時には、看護援助行動のお手本を学生に示してくれていたか」4.05 point、「5 学生に対し客観的な判断をしてくれていたか」4.03 point、「12 専門的な知識を学生に伝えるようにしてくれていたか」4.02 point、「7 学生の不足なところや欠点を、学生が適切に改善できるように働きかけてくれていたか」4.00 point で、この 8 項目が 4 point を超えていた。

評価 point が低かったのは、「19 より良い看護援助をするために、学生に文献を活用するように言ってくれていたか」3.13 point、「17 学生が気楽に質問できるような雰囲気を作ってくれていたか」3.36 point、「18 学生が実施してよい範囲・事柄を、実習の過程に応じて明確に示してくれていたか」3.36 point、「20 学生に事柄を評価しながら考えるように言ってくれていたか」3.36 point、「11 学生が緊張しているときには、リラックスさせるようにしてくれていたか」3.41 point、「25 記録物についてのアドバイスは、タイミングをつかんで行ってくれていたか」3.41 point、「26 学生一人一人と、良い人間関係を取るようにしてくれていたか」3.41 point、「39 指導方法は統一していたか」3.44 point で、この 8 項目が 3.5 point を下回っていた。

(1)－2　実習指導（方法）学校別について（表 2）

学校別で、A 大学は「3 グループカンファレンスや計画発表に適切な助言をしてくれていたか」4.19 point、「32 看護者は、患者と良い人間関係を取っていたか」4.11 point、「1 学生が実習を進める上での情報を提供してくれていたか」4.00 point の

3 項目が 4 point 以上であった。3.5 point 以下は「19 より良い看護援助をするために、学生に文献を活用するように言ってくれていたか」2.94 point、「20 学生に事柄を評価しながら考えるように言ってくれていたか」3.23 point、「39 指導方法は統一していたか」3.23 point、「25 記録物についてのアドバイスは、タイミングをつかんで行ってくれていたか」3.26 point、「18 学生が実施してよい範囲・事柄を、実習の過程に応じて明確に示してくれていたか」3.30 point、「30 実習グループの中で、学生が互いに刺激しあっって向上できるように働きかけてくれていたか」3.30 point、「41 学生がうまくいかなかったとき、そのことを学生自身が認めることができるような働きかけをしてくれていたか」3.35 point、「26 学生一人一人と、良い人間関係を取るようにしてくれていたか」3.40 point、「17 学生が気楽に質問できるような雰囲気を作ってくれていたか」3.45 point、「21 論理的な内容や、既習の知識・技術などを実際に臨床の場で適用してみるように働きかけてくれていたか」3.45 point、「40 学生に対し忍耐強い態度で接してくれていたか」3.47 point「11 学生が緊張しているときには、リラックスさせるようにしてくれていたか」3.49 point、「37 学生がなにか選択に迷っているとき、選択できるように援助をしてくれていたか」3.49 point の 13 項目であった。

B 看護学校は「9 学生に対し思いやりのある姿勢でかかわってくれていたか」が 4.46 point と最も高く、4 point 以上が 27 項目であり、「19 より良い看護援助をするために、学生に文献を活用するように言ってくれていたか」が 3.52 point と最も低く、3.5 point 以下の項目はなかった。

C 高校は「32 看護者は、患者と良い人間関係を取っていたか」4.62 point、「31 必要と考える時には、看護援助行動のお手本を学生に示してくれていたか」4.18 point、「1 学生が実習を進める上での情報を提供してくれていたか」4.15 point、「7 学生の不足なところや欠点を、学生が適切に改善できるように働きかけてくれていたか」4.14 point、「5 学生に対し客観的な判断をしてくれていたか」4.10 point、「12 専門的な知識を学生に伝えるようにしてくれていたか」4.08 point、「36 看護者は担当指導教員と良い人間関係を保っていたか」4.05 point、「6 看護専門職としての責任を学生が理解するように働きかけてくれていたか」point の 8 項目が 4 point 以上であった。3.5 point 以下は「17 学生が気楽に質問できるような雰囲気を作ってくれていたか」2.87 point、「18 学生が実施してよい範囲・事柄を、実習の過程に応じて明確に示してくれていたか」3.03 point、「11 学生が緊張しているときには、リラックスさせるようにしてくれていたか」3.10 point、「19 より良い看護援助をするために、学生に文献を活用するように言ってくれていたか」3.13 point、「26 学生一人一人と、良い人間関係を取るようにしてくれていたか」3.13 point、「30 実習グループの中で、学生が互いに刺激しあっって向上できるように働きかけてくれていたか」3.13 point、「20 学生に事柄を評価しながら考えるように言ってくれていたか」3.28 point、「37 学生がなにか選択に迷っているとき、選択できるように援助をしてくれていたか」3.33 point、「39 指導方法は統一していたか」3.33 point、「38 学生に良い刺激となるような話題を投げかけてくれていたか」3.38 point、「13 学生同士で自由な討論ができるようにしてくれていたか」3.44 point、「23 学生がより高いレベルに到達できるような対応をしてくれていたか」3.46 point、「40 学生に対し忍耐強い態度で接してくれていたか」3.49 point の 13 項目であった。

尚、C 高校は 3、8、21、24、25 には答えていない。

(1)－3　質問項目の因子分析

43 の質問項目のうち、C 高校が回答しなかった 5 項目を除き、因子分析（バリマックス回転）を行ったところ、「適切な助言・指導」「学生への手本」「受容的な指導態度」「学生能力の引き出し」の 4 因子が抽出できた（表 3）。

表 2　実習指導（方法）について（日本版 ECTB）

設問（日本版 ECTB：Japanese Effective Clinical Teaching Behaviors）	A 大学	B 看護学校	C 高校	平均
1 学生が実習を進める上での情報を提供してくれていたか	4	4.38	4.15	4.14
2 ケアの実施時に（学生に）基本的な原則を確認してくれていたか	3.7	413	3.82	3.83
3 グループカンファレンスや計画発表に適切な助言をしてくれていたか	4.19	4.17	×	4.18
4 看護者は、学生に対し（裏表なく）率直であったか	3.85	4.38	3.67	3.9
5 学生に対し客観的な判断をしてくれていたか	3.85	4.25	4.1	4.03
6 看護専門職としての責任を学生が理解するように働きかけてくれていたか	3.77	4	4	3.9
7 学生の不足なところや欠点を、学生が適切に改善できるように働きかけてくれていたか	3.79	4.21	4.14	4
8 カンファレンスや計画の発表にたいし建設的な姿勢で指導してくれていたか	3.98	4.29	×	4.08
9 学生に対し思いやりのある姿勢でかかわってくれていたか	3.81	4.46	3.62	3.88
10 学生がうまくやれた時には、そのことを伝えてくれていたか	3.72	3.96	3.46	3.68
11 学生が緊張しているときには、リラックスさせるようにしてくれていたか	3.49	3.75	3.1	3.41
12 専門的な知識を学生に伝えるようにしてくれていたか	3.91	4.13	4.08	4.02
13 学生同士で自由な討論ができるようにしてくれていたか	3.74	3.96	3.44	3.68
14 学生が学ぶことの必要性や学習目標を認識できるように支援してくれていたか	3.66	4.04	3.56	3.71
15 看護者は、学生が“看護は興味深い”と思えるような姿勢で仕事をしていたか	3.51	3.96	3.72	3.68
16 看護者は、学生に対して看護者としての良いモデルになっていたか	3.66	4.25	3.97	3.9
17 学生が気楽に質問できるような雰囲気を作ってくれていたか	3.45	4	2.87	3.36
18 学生が実施してよい範囲・事柄を、実習の過程に応じて明確に示してくれていたか	3.3	4.04	3.03	3.36
19 より良い看護援助をするために、学生に文献を活用するように言ってくれていたか	2.94	3.52	3.13	3.13
20 学生に事柄を評価しながら考えるように言ってくれていたか	3.23	3.74	3.28	3.36
21 論理的な内容や、既習の知識・技術などを実際に臨床の場で適用してみるように働きかけてくれていたか	3.45	3.91	×	3.6
22 学生に対する要求は、学生のレベルで無理のない要求をしてくれていたか	3.68	4	3.59	3.72
23 学生がより高いレベルに到達できるような対応をしてくれていたか	3.66	3.96	3.46	3.65
24 記録物の内容について適切なアドバイスをしてくれていたか	3.68	3.74	×	3.7
25 記録物についてのアドバイスは、タイミングをつかんで行ってくれていたか	3.26	3.74	×	3.41
26 学生一人一人と、良い人間関係を取るようにしてくれていたか	3.4	3.91	3.13	3.41
27 学生が新しい体験ができるような機会を作ってくれていたか	3.77	4.09	3.79	3.84
28 物事に対して柔軟に対応してくれていたか	3.72	4.22	3.67	3.81
29 実習の展開経過において適切なアドバイスをしてくれていたか	3.77	4.04	3.87	3.86
30 実習グループの中で、学生が互いに刺激しあって向上できるように働きかけてくれていたか	3.3	3.87	3.13	3.36
31 必要と考える時には、看護援助行動のお手本を学生に示してくれていたか	3.83	4.26	4.18	4.05
32 看護者は、患者と良い人間関係を取っていたか	4.11	4.17	4.62	4.3
33 学生が新しい状況や今までと異なった状況に遭遇した時は方向づけをしてくれていたか	3.64	3.96	3.72	3.73
34 学生の言うことを受け止めてくれていたか	3.87	4.04	3.82	3.89
35 学生自身が自己評価をできやすくするように働きかけてくれていたか	3.64	3.87	3.56	3.66
36 看護者は、担当指導教員と良い人間関係を保っていたか	3.87	3.96	4.05	3.95

37 学生がなにか選択に迷っているとき、選択できるように援助をしてくれていたか	3.49	4	3.33	3.54
38 学生に良い刺激となるような話題を投げかけてくれていたか	3.57	3.91	3.38	3.58
39 指導方法は統一していたか	3.23	4.04	3.33	3.44
40 学生に対し忍耐強い態度で接してくれていたか	3.47	4.13	3.49	3.61
41 学生がうまくいかなかったとき、そのことを学生自身が認めることができるような働きかけをしてくれていたか	3.35	4	3.51	3.55
42 学生の受け持ち患者と、その患者へのケアに関心を示してくれていたか	3.85	4.26	3.72	3.89
43 学生が学習目標を達成するために、適切な経験ができるように援助してくれていたか	3.7	4	3.79	3.8

青色 3.5point 以下、黄色 4point 以上

×印は高校の回答しない項目

表３　質問項目の因子分析

	設問（日本版ECTB：Japanese Effective Clinical Teaching Behaviors）	A 大学	B 看護学校	C 高校	平均
適切な助言・指導	1学生が実習を進める上での情報を提供してくれていたか	4	4.38	4.15	4.14
	2ケアの実施時に（学生に）基本的な原則を確認してくれていたか	3.7	413	3.82	3.83
	4看護者は、学生に対し（裏表なく）率直であったか	3.85	4.38	3.67	3.9
	5学生に対し客観的な判断をしてくれていたか	3.85	4.25	4.1	4.03
	6看護専門職としての責任を学生が理解するように働きかけてくれていたか	3.77	4	4	3.9
	7学生の不足なところや欠点を、学生が適切に改善できるように働きかけてくれていたか	3.79	4.21	4.14	4
	10学生がうまくやれた時には、そのことを伝えてくれていたか	3.72	3.96	3.46	3.68
	12専門的な知識を学生に伝えるようにしてくれていたか	3.91	4.13	4.08	4.02
	14学生が学ぶことの必要性や学習目標を認識できるように支援してくれていたか	3.66	4.04	3.56	3.71
	15看護者は、学生が“看護は興味深い”と思えるような姿勢で仕事をしていたか	3.51	3.96	3.72	3.68
	16看護者は、学生に対して看護者としての良いモデルになっていたか	3.66	4.25	3.97	3.9
	27学生が新しい体験ができるような機会を作ってくれていたか	3.77	4.09	3.79	3.84
	29実習の展開経過において適切なアドバイスをしてくれていたか	3.77	4.04	3.87	3.86
学生への手本	31必要と考える時には、看護援助行動のお手本を学生に示してくれていたか	3.83	4.26	4.18	4.05
	32看護者は、患者と良い人間関係を取っていたか	4.11	4.17	4.62	4.3
	36看護者は、担当指導教員と良い人間関係を保っていたか	3.87	3.96	4.05	3.95
受容的な指導態度	9学生に対し思いやりのある姿勢でかかわってくれていたか	3.81	4.46	3.62	3.88
	13学生同士で自由な討論ができるようにしてくれていたか	3.74	3.96	3.44	3.68
	17学生が気楽に質問できるような雰囲気を作ってくれていたか	3.45	4	2.87	3.36
	22学生に対する要求は、学生のレベルで無理のない要求をしてくれていたか	3.68	4	3.59	3.72
	26 学生一人一人と、良い人間関係を取るようにしてくれていたか	3.4	3.91	3.13	3.41
	28物事に対して柔軟に対応してくれていたか	3.72	4.22	3.67	3.81
	34学生の言うことを受け止めてくれていたか	3.87	4.04	3.82	3.89
	39指導方法は統一していたか	3.23	4.04	3.33	3.44
	40学生に対し忍耐強い態度で接してくれていたか	3.47	4.13	3.49	3.61
	41学生がうまくいかなかったとき、そのことを学生自身が認めることができるような働きかけをしてくれていたか	3.35	4	3.51	3.55
	42学生の受け持ち患者と、その患者へのケアに関心を示してくれていたか	3.85	4.26	3.72	3.89
	43学生が学習目標を達成するために、適切な経験ができるように援助してくれていたか	3.7	4	3.79	3.8
学生能力の引き出し	11学生が緊張しているときには、リラックスさせるようにしてくれていたか	3.49	3.75	3.1	3.41
	18学生が実施してよい範囲・事柄を、実習の過程に応じて明確に示してくれていたか	3.3	4.04	3.03	3.36
	19より良い看護援助をするために、学生に文献を活用するように言ってくれていたか	2.94	3.52	3.13	3.13
	20学生に事柄を評価しながら考えるように言ってくれていたか	3.23	3.74	3.28	3.36
	23学生がより高いレベルに到達できるような対応をしてくれていたか	3.66	3.96	3.46	3.65
	30実習グループの中で、学生が互いに刺激しあって向上できるように働きかけてくれていたか	3.3	3.87	3.13	3.36
	33学生が新しい状況や今までと異なった状況に遭遇した時は方向づけをしてくれていたか	3.64	3.96	3.72	3.73
	35学生自身が自己評価をできやすくするように働きかけてくれていたか	3.64	3.87	3.56	3.66
	37学生がなにか選択に迷っているとき、選択できるように援助をしてくれていたか	3.49	4	3.33	3.54
	38学生に良い刺激となるような話題を投げかけてくれていたか	3.57	3.91	3.38	3.58

青色 3.5point 以下、黄色 4point 以上

4）就職を希望する・希望しないものの実習指導についてのとらえ方

Y 総合病院に就職を希望するものと希望しないもので実習指導についてのとらえ方について日本版 ECTB の項目等の比較を行った。

就職を希望するもの 25 人と就職を希望しないもの 20 人について比較したところ、7 項目で有意な差はなかったが、その他では有意な差が認められた（全項目回答者対象）。

また、4 つの因子についてもすべてに有意な差が認められた（表 4）。

（Mann-Whitney U、t-test）

表 4　実習指導（方法）について（日本版 ECTB）の就職の希望比較

	設問（日本版 ECTB：Japanese Effective Clinical Teaching Behaviors）	有意確率
適切な助言･指導※※	1 学生が実習を進める上での情報を提供してくれていたか	.005
	2 ケアの実施時に（学生に）基本的な原則を確認してくれていたか	.030
	4 看護者は、学生に対し（裏表なく）率直であったか	.005
	5 学生に対し客観的な判断をしてくれていたか	.001
	6 看護専門職としての責任を学生が理解するように働きかけてくれていたか	.100
	7 学生の不足なところや欠点を、学生が適切に改善できるように働きかけてくれていたか	.013
	10 学生がうまくやれた時には、そのことを伝えてくれていたか	.198
	12 専門的な知識を学生に伝えるようにしてくれていたか	.001
	14 学生が学ぶことの必要性や学習目標を認識できるように支援してくれていたか	.035
	15 看護者は、学生が“看護は興味深い”と思えるような姿勢で仕事をしていたか	.006
	16 看護者は、学生に対して看護者としての良いモデルになっていたか	.001
	27 学生が新しい体験ができるような機会を作ってくれていたか	.015
	29 実習の展開経過において適切なアドバイスをしてくれていたか	.003
学生への手本※※	31 必要と考える時には、看護援助行動のお手本を学生に示してくれていたか	.016
	32 看護者は、患者と良い人間関係を取っていたか	.110
	36 看護者は、担当指導教員と良い人間関係を保っていたか	.008
受容的な指導態度※※	9 学生に対し思いやりのある姿勢でかかわってくれていたか	.012
	13 学生同士で自由な討論ができるようにしてくれていたか	.045
	17 学生が気楽に質問できるような雰囲気を作ってくれていたか	,018
	22 学生に対する要求は、学生のレベルで無理のない要求をしてくれていたか	.003
	26 学生一人一人と、良い人間関係を取るようにしてくれていたか	.026
	28 物事に対して柔軟に対応してくれていたか	.004
	34 学生の言うことを受け止めてくれていたか	.009
	39 指導方法は統一していたか	.055
	40 学生に対し忍耐強い態度で接してくれていたか	.005
	41 学生がうまくいかなかったとき、そのことを学生自身が認めることができるような働きかけをしてくれていたか	.047

	42 学生の受け持ち患者と、その患者へのケアに関心を示してくれていたか	.017
	43 学生が学習目標を達成するために、適切な経験ができるように援助してくれていたか	.003
学生能力の引き出し※	11 学生が緊張しているときには、リラックスさせるようにしてくれていたか	.019
	18 学生が実施してよい範囲・事柄を、実習の過程に応じて明確に示してくれていたか	.069
	19 より良い看護援助をするために、学生に文献を活用するように言ってくれていたか	.572
	20 学生に事柄を評価しながら考えるように言ってくれていたか	.249
	23 学生がより高いレベルに到達できるような対応をしてくれていたか	.007
	30 実習グループの中で、学生が互いに刺激しあって向上できるように働きかけてくれていたか	.129
	33 学生が新しい状況や今までと異なった状況に遭遇した時は方向づけをしてくれていたか	.014
	35 学生自身が自己評価をできやすくするように働きかけてくれていたか	.057
	37 学生がなにか選択に迷っているとき、選択できるように援助をしてくれていたか	.038
	38 学生に良い刺激となるような話題を投げかけてくれていたか	.005

Mann-Whitney U 青は有意差なし

t-test ※ P<.05, ※※ P<.01

高校の回答なし項目は削除

考察

Y 総合病院をモデルとして看護学生の臨地実習での印象から、実習病院および実習指導をどのように受け止めたかを聞き、それが就職を考える時にどう影響するかを分析した。

教育課程の違う 3 校で、「就職したい」ものは高校が最も多かった。全体では「就職したい」ものの割合が「就職したくない」ものの割合より上回っていた。大学でも「就職したい」と答えたものが 8 人いたことを考えると、大学教員の就職へのアプローチによっては複数人の就職もあり得る。調査を行った 10 月の時期では、就職先の選定にはまだ時間があり、「迷っている」ものも多く、やはりアプローチの工夫で就職希望者が多くなると考えられる。

県立の病院であることは就職を希望するものの最も多い理由であったが、看護師の学生への対応や指導などによって得られた病院・看護への好印象が就職先として考えようとする大きな条件にもなっている。

高度医療、大きな病院を理由に就職を避けようとするものが見られたが、大学では全くなく、それぞれの養成課程で就職場所として目指す施設が、最初から違うことが見て取れた。

他県への就職を考えるものが多数いたことに対して、アプローチの仕方によってはこの病院を選択する可能性もなきにしもあらずと考えられる。病院の立地も就職先を決める場合の迷いになっているものも多数いたことは、それ以上病院の魅力をどう打ち出すかが、今後の検討課題になるかもしれない。

今回、実習指導について学生に日本語版 ECBT を使い、評価を問うた。項目では日常的、基本的指導である「カンファレンスの助言」「患者への関わり方」「情報提供」などの指導についてはどの学校も高評価をしていた。反面、看護師が学生の困り感「緊張をリラックスさせる」「タイミングをはかって指導する」など気づきによるちょっとした介入指導に低い評価をしていた。布佐[4]は学生が実習中に判断

に困難を感じた場面での指導について、「患者の状況の洞察を助ける」「看護の進め方の判断材料を提供する」の他に「学生の考えや経験を指示する」といったまず学生を受け入れる指導が大切であることを述べている。今回、C高校が回答しなかった5項目を除き、因子分析を行った結果「適切な助言・指導」「学生への手本」「受容的な指導態度」「学生能力の引き出し」の4因子を抽出した。学生は「受容的な指導態度」「学生能力の引き出し」の因子で大学、高校が若干低い評価をしていた。大学、高校と実際実習経験や臨床経験の希薄なものは、気配りのある介入を求めている傾向がとらえられた。高校生に関しては、大学生より知識・技術の足りなさを補うことに臨床側が配慮している点が評価されていた。看護学校は比較的どの項目も評価が高く、Y総合病院の実習指導体制は、専門学校向きともいえる。

尚、山本ら[5]は、病院の実習担当者に指導評価を求め「実質的な指導」「理論的な指導」「学習意欲への刺激」「学生への理解」の4つの因子を抽出している。「学習意欲への刺激」、「理論的な指導」「学生への理解」が病院の実習指導の責任役割で有意な差が見られ、日々の実習指導者は自身を低く評価する傾向を明らかにしている。指導を誰が行うかによっても学生の評価は変わって行くと考えられる。

就職を希望するものと希望しないものの実習指導についての評価は、高校が回答しなかった5項目を除いた38項目のうち、29項目で有意な差が見られた。因子間の比較では4つの因子すべてに有意な差が見られた。やはり、すべての実習指導方法が学生に好印象を与える関わり方が就職を選択する大きな要素となっていることが明確になった。

まとめ

看護学生の実習病院での実習指導の受け止め方と、その実習病院を就職先として考える場合の影響を検討した。

① 教育課程の違う3校で、実習終了後「就職したい」ものは高校が最も多かった。全体では「就職したい」ものの割合が「就職したくない」ものの割合より上回っていた。

② 調査を行った時期は、高校、大学ではまだ就職先の選定まで時間があり、「迷っている」ものも多かった。

③ 看護師の学生への対応や指導などによって得られた病院への好印象が就職先として考えようとする一要因であった。

④ 病院の立地が就職先を決める迷いなっているものが多く見られた。

⑤ 日本語版ECBTの評価で、「適切な助言・指導」「学生への手本」など実習の基本となる指導については評価が高く、「受容的な指導態度」「学生能力の引き出し」など踏み込んだ指導では高校、大学の評価が低かった。

⑥ K総合病院の実習指導は、看護学校は比較的どの項目も評価が高く、比べて高校、大学で低かった。

⑦ 就職に関して、就職を【希望するもの】と【希望しないもの】の項目比較によって多くの項目で有意な差が見られ、因子間での比較でも有意な差が見られたということは、実習指導はその病院への就職を決める重要な要素である。

文献

1）大井千鶴、舟島なをみ、亀岡智美:看護基礎教育課程に在籍する学生の就職先選択に関する研究－病院に1年以上就業を継続できた看護師を対象として－、看護教育学研究、Vol、18 No、1、2009.

2）Lani Zimmerman & John Westfall: The Development and Validation of a Scale Measuring Effective Clinical Teaching Behaviors, Journal of Nursing Education, 27（6）, 1988.

3）中西啓子ほか：Effective Clinical Teaching Behaviors（ECTB）評価スケールを用いた看護実習指導の分析、－第1報－、川崎医療短期大学紀要22、2002.

4）布佐真理子：臨床実習において看護学生が看護上の判断困難を感じる場面における指導者の働きかけ、日本看護学会誌、19巻2号、1999.

5）山本純子、伊藤朗子、中本明世、松田藤子、門千歳、横溝志乃：日本語版ECTBを用いた成人看護学実習の実習指導評価－看護学生と実習指導者、実習指導者の役割による比較から－、千里金蘭大学紀要　11、2014.